第２節　曲物の製作と流通

13 世紀代の井戸とみられる SE418 に 4 個体の曲物が埋設されていた。側板の木取りには共通点があり、いずれも板目取りの本体に柾目取りの薄板曲物を重ね合わせたものである。整形法としては、ケビキが内面もしくは外面の綴じ込み部付近に限定される 2 個体と、内面全体に縦方向、外面全体に格子目状のケビキを施す 2 個体に分けられる。後者は、成形時の削り痕が内・外面に明瞭に残される資料でもある。本節では、新潟市内の古代・中世井戸から出土した曲物を概観するなかで、SE418 出土資料の位置づけを考える。

1994 年に行われた山木戸遺跡の調査を契機として、新潟市内では多数の曲物井戸が確認されるようになった。比較資料として取上げるのは、信濃川の河口に近い東区山木戸遺跡〔諫山 2004〕、亀田砂丘周辺に位置する江南区駒首潟〔渡邊ほか 2009〕・日水〔今井 2007〕・三王山〔朝岡 2010〕・牛道〔立木由理子 1999〕の 4 遺跡、越後平野西部の西蒲区和納館跡〔川上 1997〕および、本遺跡 2005 年調査区からの出土例である。このうち平面形が方形をなす製品は除外し、SE418 出土資料と同様の円形曲物 29 個体を観察した。この中には所属時期が明確でないものが少なからず含まれることから、古代・中世資料として便宜上一括する。各遺跡の位置と分類別の内訳などは第 26 図のとおりである。

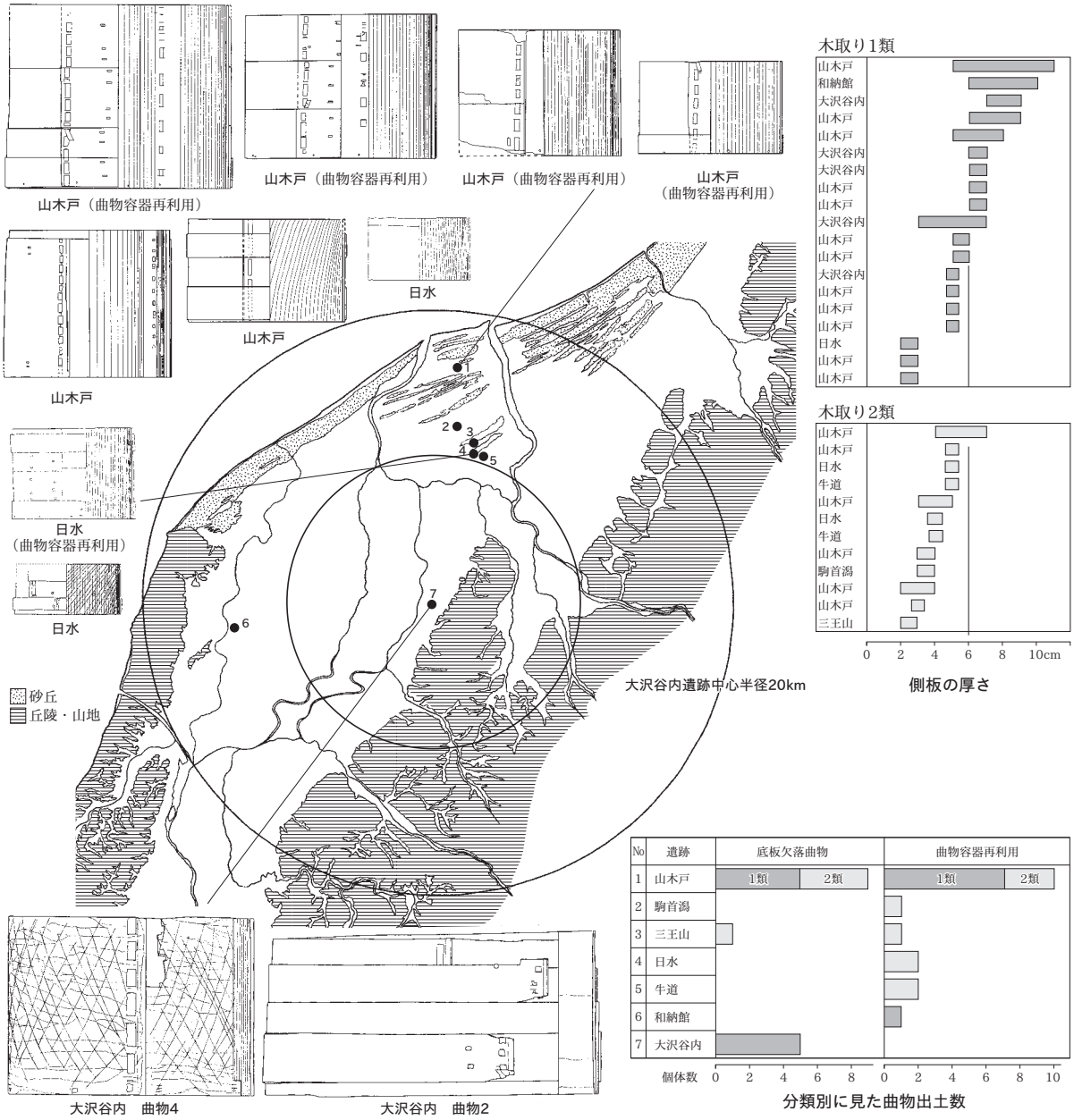
SE418 から出土した曲物は、いずれも底板固定痕が確認できず、井戸側としての使用を意図して製作されたものとみなされる。これに対し、新潟市内の 6 遺跡では底板固定用の木釘や小孔をとどめ、曲物容器を転用したことが明らかな資料が 17 個体出土している。該当資料が確認できるのは、山木戸遺跡、亀田砂丘周辺に分布する駒首潟・山王山・日水・牛道の 4 遺跡と和納館跡である。各遺跡から出土した曲物は大半がスギ材を使用する。上記 6 遺跡は砂丘地周辺や平野の中央部に位置することからスギの生育に不向きな環境に置かれており、曲物製品の消費地に当たるものと考えられる。このうち山木戸遺跡ではすべての井戸で曲物が使用されるとともに、転用品の占める割合が相対的に低い傾向にある。この遺跡では輸入陶磁器を含む多様な遺物が豊富に出土した。信濃川の河口に近い地理的環境からみて当時の物流拠点をなした可能性が高く、上記のような曲物利用は、物資の潤沢な供給環境を背景とした特殊な事例と考えるべきであろう。

新潟市内から出土した曲物は、いずれも複数の個体を重ね合わせて製作されている。側板の木取りにいくつかの組み合わせが見られる。①板目 + 柾目、②板目 + 柾目・板目、③板目 + 板目、④柾目 + 柾目、の別である。②は山木戸遺跡、③は日水遺跡で 1 例ずつ確認できた。ともに小数にとどまることから①の範疇とみなし、以下では板目材を使用する①～③を 1 類、柾目材に限定される④を 2 類とする。第 26 図右上に示すように、両者は厚さ 6mm を境に占有率が異なる。1 類では幅広い分布を示すのに対し、2 類の大多数は 6cm に満たず、総じて華奢な印象を与える。1 類は重厚な作りで、木取りが異なる柾目板を併用するケースが一般的な点からも、耐久性に優れた製品と言える。

1 類と 2 類の割合は遺跡ごとに異なる。一方、曲物の消費地と考えられるエリアでは、亀田砂丘周辺の 4 遺跡で 2 類が卓越する。これに対し、山木戸遺跡では 1 類 12 点・2 類 5 点を数え、和納館の 1 例も 1 類に該当する。一般的な農村集落とは異なる両遺跡において 1 類の占有割合が高い現象は、曲物の流通時に製品ランクが存在した可能性を想起させる。

29 個体の曲物には、すべての資料でケビキが観察できた。そのあり方は画一的で、いずれの製品も内面全体に縦方向のケビキを施す。これに斜位のケビキが部分的に加わるものもあるが、山木戸遺跡・日水遺跡・牛道遺跡で 1 ～ 2 例ずつ見られるだけである。いずれの資料も外面全体が平滑に整形されており、斜位や斜行格子目状のケビキを部分的に認める資料が山木戸・駒首潟遺跡で散見できる程度である。

以上のような特徴からなる周辺遺跡出土の曲物は、SE418 出土資料に備わるいくつかの特異性を明らかにしてくれる。大沢谷内遺跡の曲物は、2005 年調査区出土の 1 例を含め、全ての資料が 1 類にあたる。SE418 出



第 26 図　新潟市域における古代・中世の井戸側利用曲物

土の 4 個体と同様のケビキパターンは周辺遺跡で確認することができず、内・外面に削り痕をとどめる資料も皆無である。このうち、外面に明瞭な削り痕を残す 2 個体は、越後平野に流通する製品とは明らかに異質な資料であり、自家消費を意図して本遺跡内で製作されたものであろう。類例に欠ける他の 2 個体も同様の性格をもつ資料の可能性が高い。SE418 では曲物上面の小テラスにスギ材と見られる木羽板が多数敷かれており、その一角からはスギを使用した下駄の未成品も出土した。製材から製品製作に至る一連の作業が遺跡内で行われていた可能性を示唆する意味で重要な遺物である。

本次調査区の東 200m ほどに位置する 2008 年調査区では、7 世紀代の埋没谷から多数の伐採木や製作半ばの各種木製品が出土した。この中にはケビキを施す曲物側板未成品も含まれる。以後中世に至るまでの間に本遺跡内で行われた木工活動の実態は明らかでないが、本次調査で確認された漆要具の存在は、近傍に丘陵地帯が広がる地理条件を背景に木器製作の伝統が受け継がれてきたことを示す間接的な資料となろう。

北東 250m に位置する 2005 年調査区では、1 個体の曲物が井戸側として使用されていた。内面全体に縦方

向のケビキを施し、外面を平滑に整形したスタンダードな資料である。大沢谷内遺跡における上記のような状況を考慮した場合、この資料もまた遺跡内で製作されたことも考えられる。こうした想定が妥当であるとすれば、周辺遺跡から出土した同一形態の製品が本遺跡で製作された可能性も生じてくる。越後平野周辺における曲物の製作・流通を考える上で端緒となりうる資料としてSE418出土の曲物を位置づけたい。

第３節　アスファルト塊をめぐって

遺物包含層にあたるⅢ層と遺構内から、古代から中世に属すアスファルト塊が大量に出土した。総重量にして3.76 kgにのぼり、823m^{2}たらずの調査区域からの出土量としては特筆に価するものである。

第Ⅵ章で述べたように、出土したアスファルト塊は大小さまざまなサイズからなる。いずれも不整形な形状をなし、中型～大型個体では厚さ1cm ～ 3cm台の偏平な資料が大多数を占める。遺構に伴う資料としては、9世紀前半と推定されるSD52、9世紀後半～ 10世紀初頭と推定されるSD34・SX29、SE389、13世紀代のSE389・SE418などから出土し、本次調査区における古代・中世の全期間にわたり存在することが確認できた。

今回の調査では微細種実の採取を目的とした土壌水洗を５箇所の遺構覆土で行い、これらの全てから微細なアスファルト粒子が多量に検出された。調査区の広い範囲に微細なアスファルト塊が分布していたことをうかがわせるとともに、この近辺に原油が湧出し、自然生成したアスファルトが各所に放置または廃棄された可能性を強く示唆している。

多量に出土したアスファルト塊のなかでとりわけ重視されるのは、井戸の中からまとまった資料が検出されたSE418でのあり方である。この井戸は下部に４個体にのぼる曲物が埋設されており、曲物上面から最下部に至る土砂内を中心に337gのアスファルト塊が堆積していた。曲物内部の自然堆積土からは、木片・炭化物・微細種子も出土した。こうした状況に基づけば、この井戸は機能時に開口しており、アスファルト塊が絶えず落下･堆積する環境に置かれていたのであろう。予想される水質や４個体もの曲物を使用した入念な作りから見て、飲料水や農業用水などの確保を目的に利用した施設とは考えにくいところである。

SE418の性格を考えるうえで、中段から確認された木羽板層（第16・18層）は少なからず重要である。それらは曲物の上面周囲を取り巻くように２層にわたり堆積し、人為的に敷かれた状況を示していた。木羽板の分布範囲は幅30cm ～ 40cmのテラスをなしており、何らかの作業が可能な広さをもつ。同層におけるアスファルト塊の推定堆積量は300g以上にのぼる。アスファルト塊は埋積土の上部からも出土した。しかしその量は20gにすぎず、井戸内部のアスファルト塊の大半が木羽板層で自然生成したことをうかがわせる。本次調査区では、石油に由来する黒色付着物が土師器無台椀で確認された。この中には外部に流出した状態で付着するものがあり（図版25－51など）、原油の利用が遺跡内で行われていたことを明示する。ここに列記したようなことがらを考え合わせるならば、この井戸では当時原油が湧出していた可能性が高く、その採取を行う「油井」として機能していたことも十分考えられる。

越後平野の周辺では、古代・中世に属すアスファルトの出土がいくつかの遺跡で確認されている。本遺跡の2008年調査区では、古代・中世の井戸などからアスファルト塊が確認され、中世の井戸から出土した漆器椀にはアスファルトが付着していた。新津丘陵東麓の沖積地に位置する五泉市新保遺跡では、古代の土坑内から扁平なアスファルト塊が出土した〔山崎ほか2004〕。本次調査区出土資料と形状が酷似するものである。本遺跡の北9kmの沖積地に立地する秋葉区上浦遺跡では、古代の井戸からタール状の原油が湧出していた。井戸側に利用された曲物や井戸の中から出土した漆器椀にもそれらが付着することから、油井の可能性が指摘されている〔坂上2003〕。このほか、上浦遺跡に近い中谷内遺跡では石油臭をとどめるタール状物質が須恵器長頸壺の内部に付着していた〔立木ほか1999〕。

以上のように、新津丘陵周辺に分布する古代・中世遺跡では、石油に関連した資料が徐々に増加してり、その